

1. 参考文献

- 「『超』文章法 伝えたいことをどう書くか」野口悠紀雄、中公新書、2002年
- 「勝つための論文の書き方」鹿島茂、文春新書、2003年
- 「論文・レポートのまとめ方」古郡廷治、ちくま新書、1997年
- 「『社会調査』のウソ リサーチ・リテラシーのすすめ」谷岡一郎、文春新書、2000年

2. 論文のテーマの選び方

- ・何を議論したいのか、頭を整理する必要がある。米国では narrow down を推奨。
- ・確たるデータを取れないテーマを選べば、論説の正しさを立証するのが難しくなる。
 激情で突っ走っても、一般読者を納得させることはできない。信頼性の高いデータを冷静に提示し、論理的に政策提言を行う必要がある（さもないと説得されない）。
 この過程で、データの解釈に無理があってはいけない 谷岡先生の本を参照
- ・あまりに独創的過ぎて、なかなか理解されない **先行研究**を調べておくとうよい。
 学問の世界でも、新理論の提示はなかなか受け入れられなかった歴史がある。
- ・だからと言って、人の受け売りばかりでは**剽窃**に 書き手のオリジナリティも必要。
 議論され尽くしたテーマを選ぶとオリジナリティを発揮するのが大変になる。
 沢山の論文を調べ、新しい切り口から分類して特定分野の研究の流れを紹介するタイプの論文もある（「サーベイ論文」と呼ばれる）が、学部生には不向きでは？

3. 論文の構成

- ・理論経済学系の論文の一般型：はじめに、先行研究の紹介（批判的な検討）、モデルの提示、実証分析による立証（計量経済学を駆使）、研究結果の含意（現実との対応関係、各種政策の意義など）、おわりに（まとめと今後の研究課題など）、参考文献
- ・調査論文（官庁やシンクタンクなど）：理論経済学系の論文ほど、の厳密さが無い 多種類のデータを用いて、直観に訴えつつ、分かり易く立論する。
 上記 を省略し、を簡単なロジック（経済学ではなく、経験則を紹介する程度のこと）に置き換え、でグラフを多用することが多い。
- ・紹介型の論文：今まで知られていなかった重要な資料、新しいアンケート調査結果などを紹介し、それらの意義を考察する（上記 に相当）タイプの論文。
 新資料の発見、新しいアンケートの考案・実施（しかも、かなりのサンプルが必要）などがないと苦しい。他人のアンケートを使う場合は、新しい切り口（例えば個票データの分析など）、他の調査との整合性チェックなどが必要になる。

4. 誤解を生じない文章を書く

- ・複雑な修飾関係を組み込むと多義性が生じる 文を短くする、主語・述語の関係をはっきりさせる、接続詞で上手につなぐ、句読点を上手に使う、などの対応策が必要。
 例：「銀行はリスク管理を強化して地価下落に苦しみ経営困難に陥った企業を調べる」
- ・論理が発散しないようにする 論理の流れを考えて文章を構築する
 できれば、データで立証しながら議論を進めていくことが望まれる。
- ・独善を廃した論文を書く 何回も見直す（自分の意図と別の読み方がないか、誤字・脱字はないか。論理に飛躍がないか等を調べる） 色々な人にコメントを貰う
- ・ワープロ・ソフトの場合、文章の組み換えは容易 最初の文章には拘らない。
 誤字には注意。また、バージョン管理にも注意の要（古いバージョンを変更すれば大変）。
- ・図表をできるだけ効果的に使う プレゼンテーションの効果を考える

以上